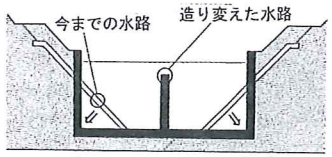
心の目

連載エッセイ(248) 札幌かに本家社長 日置 達郎

『愛知用水の歴史 ⑥』

愛知用水の完成は、その地域に大きな変化をもたらしました。住宅地が増え工業面での経済的成長はめざましく、そのため、当初の計画に比べ水需要も大きく変わっていきました。愛知用水は昭和三十六年九月に通水を迎えましたが、その豊かな水の供給を頼りとして建設されたのが、愛知県東海市にある「**新日鐵住金名古屋製鐵所**」（当初は「東海製鐵」としてスタート）でした。昭和三十六年一〇月に冷延工場が操業を開始して以来拡張を続け、現在東京ドーム約一三〇個分の敷地面積を誇り、年間粗鋼生産量は約六〇〇万トン（日本第七位）と、**トヨタ自動車など中部のモノづくりを根底から支えています。**愛知用水の通水なくしては、中部のモノづくりの実績はここまで大きくならなかった、と言えるのではないでしょうか。

その後、二期工事として、昭和五十五年から平成十七年までの二十年以上をかけ、様々な追加工事が実施されました。幹線水路が経年劣化し、また水路は地震や災害の影響は受けにくいものの今後の水需要増を考慮して大改修をする事になりました。また、この水路の中央に高い仕切りを作り、二列の水路としました。水路が二つあれば、水量が少ない時は片方を閉めることで、水路はクラック（ひび割れ）等の補修がやりやすくなりました。



【造り変えた水路の形】

トンネルやサイホン（道路や川と交わる場合、下にくぐらせる水路）も同様に二本目を造っています。これらに加え、高蔵寺の水管橋では耐震補強工事も行うなど、時代の変化とともに、より良い運用に向けた対応が取られていったのは、この用水が持つ重要性を物語っていると感じます。

さて、先回のコラムでは「明治用水」についても触れましたが、その実現に道筋をつけた「鈴木弥厚翁」の生誕二五〇年の記念事業が、昨年地元で盛大に行われました。和泉村（現在の安城市和泉町）出身の彼は用水計画を立て、算学の大家である「**石川喜平**」の協力を得て、五年の歳月をかけ一八二六年に測量を完成、翌年幕府へ出願し、数年後に幕府から一部許可が出たのですが、その年六十九歳で弥厚翁は亡くなり、計画そのものが頓挫してしまいました。その三十九年後の一八七三年（明治六年）、「**岡本浜松**」と「**伊豫田与八郎**」の二人が、弥厚翁の意思を引き継ぎ、一八七九年（明治十二年）から昼夜兼行で工事が進められ翌年「明治用水」として完成したのです。いずれも、愛知用水を完成へと導いた「久野庄太郎」氏と「濱島辰雄」氏二人の存在を彷彿とさせ、共に郷土・愛知を支えた人たちとして称えたいと思います。

（次号に続く）

著者プロフィール
昭和10年、三重県津市美杉町出身
札幌かに本家チェーン代表取締役
店舗設計や庭造りが趣味。
日本飲食産業協会副会長
名古屋まつり・英傑行列
第十代徳川家康役

平成28年9月1日発行
月刊「なごやか」9月号
掲載